

タイトル	外邦図（朝鮮・略図）地名における古代朝鮮語語彙： 「忽（kol）」「己（ki）」「（cas）」について
著者	水野，俊平
引用	北海商科大学論集，2(1)：40-47
発行日	2013-02

外邦図(朝鮮・略図)地名における古代朝鮮語彙

—「忽(kol)」「己(ki)」「𪛗(cas)」について

The ancient Korean words in map of Korean Peninsula
About ancient Korean "kol" "ki" "cas" meaning a castle

水野俊平 MIZUNO, Shumpei

要旨

本稿は19世紀末から20世紀初めにかけて製作された朝鮮半島地形図の地名を通して古代朝鮮語古語を考察することを目的とする。本稿で考察の対象とするのは日本が朝鮮半島において1895年から1906年までの間に測図した5万分の1地形図である。この地形図の地名は漢字で表記され、その地名の読み方が片仮名で注音されている。地名はその保守性ゆえに古形を保っている場合が多く、地名とその読み方を調査することで、古代朝鮮語の一端を明らかにすることができると思う。

古代朝鮮語において「城」は「忽(kol)」「己(ki)」「𪛗(cas)」であったと考えられている。本稿で考察の対象とした地形図からは「𪛗(cas)」を見出すことができたが、「忽」「己」を見出すことはできなかった。その「𪛗(cas)」も朝鮮半島の内陸地域にわずかに残されているに過ぎない。大部分の場合、「城」は漢字語の「城(seong)」で現れている。このことから「城」をあらわす古代朝鮮語のうち「忽(kol)」「己(ki)」は早くに淘汰されて「𪛗(cas)」のみが命脈を保ち、さらに「𪛗(cas)」も「城(seong)」によってほとんど淘汰されたという推測が可能である。

キーワード: 朝鮮半島、地形図、地名、古代朝鮮語

Abstract

This paper is intended to clarify words of ancient Korean through a map published from the end of 19th century through the early 20th century. This article studies one-50,000th topographical maps which Japan produced from 1895 through 1906 in the Korean Peninsula. The place name of this map is written in Chinese characters, and the method to read is written in katakana aside. The katakana written beside the place name displays a method to read the place name. Because an archaic word is included in the place name, I can clarify ancient words of Korean by investigating how to read place name.

The castle was called "kol" "ki" "cas" in ancient Korean. I was able to discover "cas" in the place name of the map, but was not able to discover "ki" "kol". This "cas" was slightly left in the inland in Korean Peninsula. It is thought that "ki" "kol" became extinct at early time. In the words of the archaic word which meant a castle, it was recognized that "cas" was left until the 20th century. However, in the case of most, the castle was called "seong" in Chinese character word.

Therefore, the word of an archaic word meaning a castle is screened by "seong" of the Chinese character word, and it is thought that "cas" slightly remained in the place name.

Keywords : Korean Peninsula, topographical map, place name, ancient Korean

1. はじめに

朝鮮語史は一般的に古代朝鮮語(訓民正音創制以前～15世紀中葉)、中期朝鮮語(訓民正音創制～壬辰倭乱[文祿・慶長の役]、15世紀中葉～16世紀末)、近世朝鮮語(壬辰倭乱以降～、16世紀末～)および現代朝鮮語に区分される。しかし、その音韻や語彙、文法の実相を知ることができるのは、15世紀中葉に表記手段としての訓民正音が創制された後であり、それ以前の朝鮮語については漢字借字表記で記された僅かな資料以外には考究の方途がない状況である。特に統一新羅時代以前の古代朝鮮語については『三国史記』、『三国遺事』および中国・日本などの史書における地名・人名などから僅かにその語彙が再構され、そこから当時の音韻や統辞を推測しうるに過ぎない。こうした状況のもとで、古代朝鮮語の研究は漢字で借字表記された固有名詞を中心に行われてきた。主な研究対象は『三国史記』『三国遺事』などの地名であったが、朝鮮時代から現代に到るまでの地名も対象とされた。地名はその保守性故に古語が含まれていたり、地域性が反映されていると見なされているためである。ただし、朝鮮時代の地誌や地形図における地名もほとんどが漢字で表記されており、そこから朝鮮語の語彙を再構するのは容易ではない。

本稿で考察の対象とする「外邦図(朝鮮・略図)」とは19世紀末から20世紀初頭にかけて日本が作製した朝鮮半島の5万分1地形図の一部である。この地形図は地理学における「外邦図」の一部に含まれるが、この「外邦図」とは「19世紀中葉から20世紀中葉にかけて、台湾、樺太、朝鮮半島、中国大陸および東南アジアなどにおいて日本が作製した(主として)軍事用の地形図」と定義される。よって「外邦図」に含まれる「朝鮮半島の地形図」は1945年以前に日本が朝鮮で作製した地形図の殆んどが該当することになる。朝鮮半島においては日本が作製した5万分1地形図としては1895年から1906年にかけて測図された「略図」(第1次地形図・仮図)、1909年から1911年にかけて測図された「地形図」(第2次地形図)、日韓併合後の1914年から1918年にかけて測図された「基本図」(第3次地形図)の3種類がある。本稿で考察の対象としているのは「略図」(第1次地形図・仮図)である。本稿では煩を避けるために「略図」という用語を用い、その後測図され日韓併合後に発行された地形図については「地名図」「基本図」という名称を用いる。¹⁾

「略図」は朝鮮で初めて作製された5万分1地形図であり、豊富な地理情報を含んでいる。また地名が漢字で記され、その読み方が片仮名の振り仮名によって記されており、それを解析することによって古語の再構や地域言語の分布解明などの成果が期待される。本稿では「略図」における地名の特徴を見渡し、「城」が含まれる地名の注音に対する調査結果を踏まえて朝鮮語古語抽出の可能性について論じようと思う。

2. 「略図」「地形図」「基本図」の作製過程

ここでは、光岡雅彦(1982)、谷屋郷子(2004)、清水靖夫(2009)などの先行研究の成果と『陸地測量部沿革史(草案)』の記述に基いて「略図」および「地形図」「基本図」の作製経緯を見渡す。1894年、陸軍に「臨時測図部」が編成されたが、これは朝鮮半島や中国大陸での軍用地図作製のために、特別に編成された組織であった。『陸地測量部沿革史(草案)』には、1895年9月下旬から10月上旬にかけて、臨時測図部の朝鮮測図担当に任じられた「第一班」「第四班」が「人目ヲ避ケル為ニ分割シテ」、「順次各任地ニ到着シ諸種ノ困難ヲ排除シツツ着々事業ヲ遂行セリ」とある。このことから「略図」の測図は1895年から始められたことがわかる。

しかし、1896年の部分には、「断髪令にともなう騒擾によって情勢が不穏となり測量の続行が困難となり、1896年5月20日に撤収した」という記述が見られ、1896年の陸地測量部解散の後も「測量手他十人が韓国各地の秘密測図に従事したが、情勢不安のために9月17日に撤収した」という記述が見られる。こうした中断をはさみつつも日露関係の緊張によって再び測図が開始され、1903年の項には、「日露関係の緊迫化にともない、10月7日に3人の測量手が渡韓、さらに29日に22人、30日に17人が韓国秘密測図に参加した」という記述が見られる。

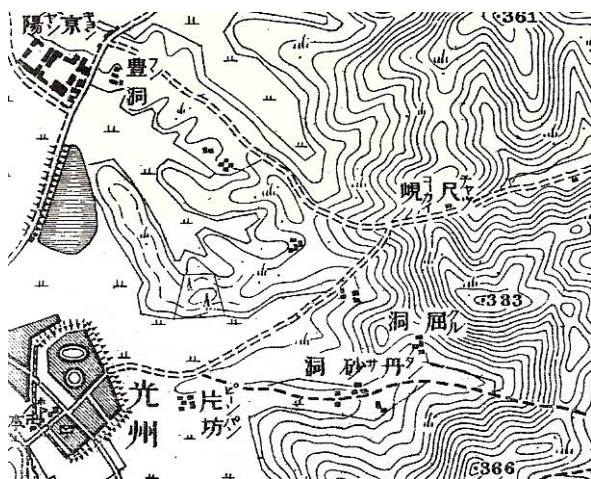
谷屋郷子(2004)は、『国外地図目録』『国外地図一覧表』などを用いて、朝鮮半島中部の黄海道・京畿道から南東部の慶尚道にかけては1895年(明治28年)に測図され、1896年(明治29年)と1898年(明治31年)には忠清道、1899年(明治32年)には全羅道、1900年(明治29年)には咸鏡道、1905年～1906年(明治38年～39年)にかけて平安道が測図されたことを明らかにしている。『陸地測量部沿革史(草案)』には「通訳」「通弁」が測図に随行した事実が記されており、これらの「通訳」「通弁」が現地住民から地名の表記とその読法を採取したと思われる。

この「略図」に続いて「地形図」が作製された。「地形図」の測図は1909年(明治42年)から1911年(明治44年)にかけて行われ、1913年(大正2年)から1916年(大正5年)にかけて発行された。1910年8月の日韓併合に伴い、朝鮮総督府の機関として朝鮮臨時土地調査局(後に土地調査局)が設置され、土地調査事業にともなう地籍図作製と連携して「基本図」が作製された。1914年(大正3年)から1918年(大正17年)の間に朝鮮全域における測図が完了している。

3. 先行研究

「略図」に対する研究は主に地理学の分野で行われ、朝鮮語学における研究は、光岡雅彦(1982)を唯一の例外として、行われてこなかった。しかし、韓国における地名研究においては「基本図」および日本人が作製した地誌資料に収録された地名がしばしば引用されている。地名はその保守性ゆえに古代・中期朝鮮語の語彙や音韻、及び方言形が保たれていると見られ、朝鮮語学研究的資料としての資料的価値を有するものと期待される。

「略図」には地名が漢字で表記され、その横または下に読法が片仮名で注音されているため、その地名が実際にどのように読まれていたのかを容易に把握することができる。その例として「略図」のうち「羅州2号光州」の一部を<図1>として示す。



<図1> 「略図」の地名表記と注音

その資料的価値については、すでに宋基中(2001)が「韓国の固有語地名を考究するためには漢字で表記された地名のみを対象にしていたのでは限界があり」、「漢字表記にハングルあるいは他の文字によって訓読表記を併記した資料でのみ訓読表記を確認できる」、と述べた次第がある。

「略図」の国語学的な資料価値について言及した論考としては光岡雅彦(1982)がある。光岡雅彦(1982)は「特異なのはその部落名注記で、訓読名、古訓読名、古借字名をふんだんに含んでいる。現在の音読主義とはまるでちがう」と述べ、日韓併合以後に推進された「朝鮮臨時土地調査事業」の結果、朝鮮半島の地名は日本人の手によって大幅に整理・改編されたと指摘したうえで、「略図」には整理・改編を経る前の朝鮮の地名が反映されていると述べている。光岡雅彦(1982)は朝鮮地名の基礎部分に

あたる「里・洞」の名称について、「略図」をもとに北緯38線以南に位置する3万洞里を次のように分類している。

- ①音読によるもの…18,000(例:劫飛カッピ)
- ②訓読によるもの…4,000(例:新基セット)
- ③音訓併読によるもの…3,000(例:沃野ワイテル)
- ④古借字によるもの…2,000(例:斗豆米アツミ)
- ⑤古訓によるもの…3,000(例:四加里ヌドリ)

さらに光岡雅彦(1982)は日本による地名整理・改編の結果、②③④⑤はことごとく音読に統一されるか、もしくは地名表記が音読に合わせて改変され、こうした地名の改変は朝鮮の農村の言語生活に大きな影響を与えたと指摘した。ただし光岡雅彦(1982)は地名を考察するにあたって「大正・昭和の地図や記録と比較してどうなっているかをみるのも必要だろうし、古い新羅や高麗時代の記録にどう載っているかも調べなければならない」とは述べているものの、韓国側の地誌や地形図、地名資料を参照して片仮名の注音から地名を再構築しようとした痕跡が見られず、その結論に疑問が残る部分が少なくない。²⁾

4. 「略図」の概要

「略図」は484枚が発行されたが、そのうち445枚が国立国会図書館に所蔵されている。また東北大学・京都大学・お茶の水女子大学・韓国学中央研究院(韓国)などに国立国会図書館に所蔵されていない12枚が所蔵されており、合計457枚が現存している。影印本としては1996年に韓国の成地文化社が国立国会図書館に所蔵されている445枚を影印して刊行している。本稿ではこの国立国会図書館に所蔵されている地形図に岐阜県立図書館に所蔵されている地形図を加え、その地名を分析した。

「略図」には約43,000もの地名が収録されていることが김종혁(2009)などの先行研究で明らかになっている。また、その地名の大部分が漢字で表記されており、その上側・右側に片仮名で地名の読み方が注音されている。この注音を通して当時の朝鮮人がその地名をどのように読んでいた(呼んでいた)のかが把握できる。例えば「花山」「泥橋」(羅州2号光州)などの地名には「コンメー(花の山)」、「チンダリ(泥の橋)」という音註が付されており、そこから「꽃매(kkotmae)」「진다리(jindari)」という語彙を容易に復元できる。これらは地名表記に用いられた漢字音をそのまま読んだものではなく、漢字の訓を利用して読んだ、言わば訓読に当たる。こうした地名の注音の中には光岡雅彦(1982)が指摘した通り、その地域の方言形を反映していたり、古代朝鮮語の痕跡を残していると思われるものも散見される。³⁾ こうした地名からは、これまで十分に解明されてこなかった当時の方言形の分布を究明したり、古代朝鮮語の語彙を再構築できるなどの成果が期待できる。また、地形図は地誌と異なり、平面図であるため、地名の正確な位置を把握することが可能である。

5. 古代朝鮮語における「城塞」関連語彙

「略図」の地名はその読法が片仮名で注音されているが、地名の保守性故にその読法には古代朝鮮語の痕跡をとどめているものもあると思われる。本稿では「略図」の地名を調査し、その結果から「城塞」に関する古代朝鮮語語彙の抽出を試みるものとする。対象を城塞に限定したのは朝鮮において城塞の遺構が長期間保全されており位置の把握が容易なことと、城塞に関する古代朝鮮語がすでに明らかにされているためである。まず、古代朝鮮語において「城塞」をあらわす語彙がいかなるものであったのかを見渡す。

先行研究によると「城」を高句麗では「忽(*xul>hol)」、百済では「己(ki)」、新羅では「𪎗(cas)」と呼んだものとされている。李基文(1991)は高句麗の地名において「忽」と「城」が対応しており、百済の地名において「己」と「城」が対応しており、新羅の郷歌(彗星歌)における「城叱」が中期朝鮮語における「𪎗(cas)」と一致することがその根拠とされている。また古代日本語の「サキ(城、saki)」または「き(城、ki)」

は新羅の「𪛗(cas)」と百濟語の「己(ki)」の借用であり、これは築城法が新羅と百濟から日本に伝えられたためであると指摘されている。ここでは尹幸舜(1994)が例示した地名・郷歌、及び日本側資料における用例を示す。

<高句麗地名>

陰城郡本高句麗仍忽県(『三国史記』卷35・地理2)
 赤城県本高句麗沙伏忽(同)
 水城郡本高句麗買忽郡(同)
 溝漚者、句麗名城也。(『三国志』魏書東夷伝・高句麗条)

<百濟地名>

悦城県本百濟悦己県(『三国史記』卷36・37・地理2・3)
 儒城県本百濟奴斯只県(同)
 潔城県本百濟結己郡(同)

<新羅など>

「城叱」(新羅郷歌「彗星歌」)

<『日本書紀』>

家外作城(キ)柵(カキ)(『日本書紀』岩崎本卷24・278行)
 軍衆悉漏城(キ)空之。(『日本書紀』図書寮本・卷23・122行)
 根使主逃匿、至於日根造稻城(イナキ)。(『日本書紀』前田本・卷14・361行)
 到于新羅攻五城(サシ)而拔。(『日本書紀』岩崎本卷22・50行)
 吞百濟之城(サシ)(『日本書紀』図書寮本・卷14・283行)

柯羅俱爾能基能陪爾陀致底於譜磨故幡比例甫爾須母耶魔等陸武岐底
 (韓国[からくに]の城[き]の上[へ]に立ちて大葉子[おほばこ]は領巾[ひれ]振らすも日本[やまと]へ向きて)(『日本書紀』欽明天皇23年7月条)

柯羅俱爾能基能陪爾陀々志於譜磨故幡比礼甫羅須弥喻那爾婆陸武岐底
 (韓国の城の上に立たし大葉子は領巾振らす見ゆ難波[なには]へ向きて)(同)

中期朝鮮語において高句麗語の「忽」と百濟語の「己」はその痕跡を見いだすことができないが、新羅語の「𪛗(cas)」は15～16世紀まで命脈を維持し、実際に用いられたようである。中期朝鮮語における用例を以下に示す。

城山𪛗뫼[cas-moi](『竜飛御天歌』卷1・52)(1447年)
 城은 자시[cas-i](『月印釈譜』卷1・6)(1459年)
 城𪛗성[cas-syeong](『訓蒙字会』[比叡山本]中・5)(1527年)

6. 「略図」における城塞関連語彙の抽出

5. では城塞を意味する古代朝鮮語が「忽」「己」「cas(𪛗)」であること、このうち「cas(𪛗)」は中期朝鮮語まで命脈を保ったことを述べた。では、これらの語彙は「略図」の地名においてどのように反映され、いかなる分布を示しているのだろうか。前述したように「略図」の地名は漢字で表記された地名に片仮名で注音が施され、その注音の中には地名表記に用いられた漢字を訓読したものも含まれている。その注音は当時の地名の読法に沿ってなされたものと思われ、「城」の注音においても漢字音「성(城、seong)」ではなく、当時の読法を反映した注音がなされている可能性がある。本稿では「略図」における地名約43,000のうち「城」の含まれる地名をすべて抽出した後、そのうち訓読を反映したと思われる地名を再抽出し

た。⁴⁾ 地名と注音、現在位置、『韓国地名総覧』における地名を<表1>に示す。⁵⁾

「略図」地名		注音	現在位置	『韓国地名総覧』
㉑	外城	オイジャー	忠清南道論山市夫赤面外城里	외갓(oe-jas)、외재(oe-jae)、外城(외성·oeseong)
㉒	鳥城	サージャー	忠清南道燕岐郡錦南面竜潭里	—
㉓	城北	チヤントエー	慶尚北道居昌郡熊陽面東湖里	갓뒤(jaes-dwi)、성디(seong-di)
㉔	石城	トルチャシ	忠清北道沃川郡青城面和城面	돌갓이(dol-jas-i)
㉕	城北	チヤツコリ	大田広域市儒城区北城洞	갓뒤(jas-dwi)
㉖	酒城	スルムチエー	忠清北道清州市酒城洞	수름재(sureum-je)
㉗	阿城	エーヂエー	忠清北道槐山郡沼壽面阿城里	아재(a-jae)、애재(aejae)、아성(aseong)
㉘	秀城	スヂエー	忠清北道清原郡北一面内秀里	수재(su-jae)、수성촌(suseong-chon)
㉙	鳳城里	ジャージャ	京畿道軍浦市唐洞唐洞	새전리(saejeon-ri)、봉성(pongsaeng)
㉚	沙城	サーヂエー	黄海南道	새재(sae-jae)
㉛	城洞	～チャ	黄海南道	갓(jas)
㉜	塩城	ヨムジエ	黄海北道	염재(yeom-jae)
㉝	南城	ナムチヨ	黄海北道	남갓?(nam-jas)
㉞	銀城	ウムチャ	黄海北道	은갓(eun-jas)
㉟	廣城里	ノブチャイ	黄海北道	넙갓(neop-jas)
㊱	石城里	トルチャ	黄海北道	돌갓(tol-jas)
㊲	城北	チヤウツイ	黄海北道	갓뒤(jas-dwi)
㊳	城北	チヤツテー	黄海北道	갓뒤(jas-dwi)
㊴	水城洞	スチャツ	平安南道	수갓(su-jas)

<表1>「略図」における「城」の音注(訓読)

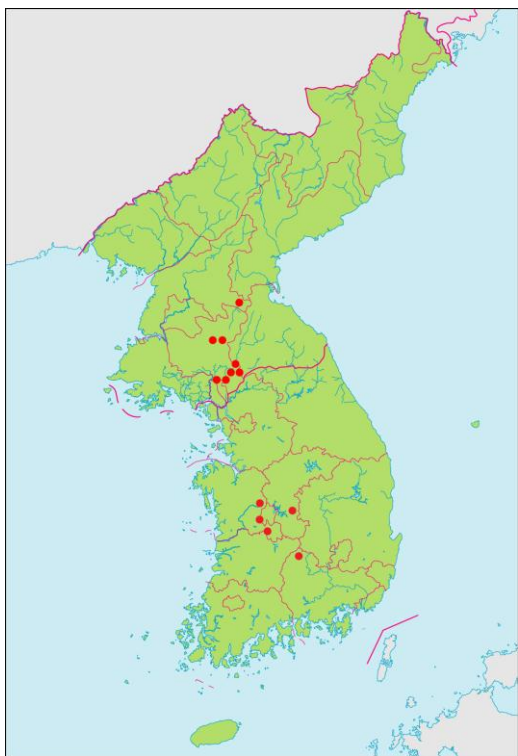
<表1>で見られるように「城」に対する訓読が確認されたのは19ヶ所であり、そのうち13か所が「갓(cas)」を注音したと思われる「ジャー(チャー)」「チャ」「チヤン」「チヤツ」「チャイ」などであった。13か所のうち5か所の地名の附近にはいずれも城塞もしくは城塞に類似した地形が存在する。ただし、北朝鮮地域の地名については資料の制約により城塞の有無を確認できない。また「재(jae)」(峠)が含まれると思われる地名が5か所ある。そのうち韓国に位置する3ヶ所にはいずれも城塞は存在しない。これは、「峠」をあらわす「재(jae)」が含まれた地名が漢字表記される過程で「城」の字が充てられた結果であると思われる。李炳銑(1982)は「재(jae)」(「峠」)の語源を「갓(cas)」であると見ており、あるいは「갓(cas)」が「城塞」とともに「峠」をも意味する語彙であった可能性もある。韓国に位置する地名のうち「갓(cas)」(「재(jae)」)が含まれる地名の詳細は次の通りである。

㉑の附近には「外城里山城」という城塞跡がある。城の周囲は400メートル、城壁の高さは1.5メートルであり、城門の痕跡は残されていない。百済の土器が出土していることから、築城年代は百済にまで遡ると推定されている。黄山城の外城で西南方向の重要な防禦を担っていたものと思われる。

㉒の附近にある「雨傘峰」に石で築城された城塞跡があるが、地名は消滅している。

- ㉔の附近には金海金氏が築城したという城塞の跡が残る。
- ㉕の附近には城塞がなく、地名の由来は地形によるものである。
- ㉖城塞が消滅し、地名だけが残っている状態である。
- ㉗城塞はなく、「수륜재(sureum-je)」という固有語地名から「酒城」という表記がなされたと思われる。
- ㉘城塞はなく、小さい峠があったことから「아재(ajae)」または「阿城」と呼ばれていた。
- ㉙城塞はなく、集落名が「수재(su-jae)」「秀城村(suseong-chon)」と呼ばれていた。

ここで、注目されるのは、「城」の訓読がすべて「𪛗(cas)」で現われ、高句麗・百済系統の「忽」「己」は現われなかったこと、百済の山城であることがほぼ確実視される㉕においても「𪛗(cas)」が用いられていることである。〈表1〉における「𪛗(cas)」の分布を地図上に示す。



〈図2〉「𪛗(cas)」が含まれた地名の分布

半島南部では㉔を除くすべての地名が百済の故地である忠清南北道および大田広域市に集中していることがわかる。さらに半島北部では高句麗の影響下にあったと思われる黄海南北道に集中している。このことから、朝鮮半島全域にわたって「城」を意味する語彙として新羅系の「𪛗(cas)」のみが命脈を維持し、高句麗・百済系統の「忽」「己」は淘汰されたということが推測できる。このことは「略図」の地名から抽出できる朝鮮語古語の年代的範囲に限界があるということでもある。先行研究において明らかにされているように、「城塞」を意味する古代朝鮮語の中で中期朝鮮語まで用いられたのは「𪛗(cas)」のみであった。「略図」において「𪛗(cas)」が反映された地名しか見いだされなかったということは、「略図」から抽出できる朝鮮語古語は中期朝鮮語あたりにとどまるということの意味する。さらに〈図2〉によって確認できるように、「𪛗(cas)」が確認できる地域が極めて限定されていることは、「略図」の測図当時までかろうじて命脈を維持していた「𪛗(cas)」も、漢字音で読まれる「성(城, seong)」によってほぼ淘汰されていたものと思われる。なお、「𪛗(cas)」が反映された地名は山間部に分布しており、この語が平地に位置した「邑城」ではなく、山地に位置した「山城」を意味するものであったことが推測される。

7. 結論

本稿では「略図」における地名の特徴を見渡し、「城塞」を意味する地名の注音に対する調査結果を踏まえて朝鮮語古語抽出の可能性について論じた。調査の結果、忠清南北道および平安北南道を中心に新羅系の「갓(cas)」が含まれる地名を見いだすことができた一方、高句麗系の「忽」、百濟系の「己」を見いだすことはできなかった。「갓(cas)」は古代朝鮮語における「城塞」をあらわす語彙の中でもっとも長い命脈を保った語彙であり、調査結果もこれを反映したものであると言えよう。このことは、「略図」地名の注音から抽出できる古語の時代的範囲が限定されており、「城塞」に限って言えば古代朝鮮語の語彙まで遡り得ないということの意味するものである。ただし、本稿の考察は「城塞」に関する語彙に限定したものであり、先行研究で明らかになっている古代朝鮮語語彙が「略図」の地名にどのように反映されているかを考察し、さらなる朝鮮語古語抽出の可能性を探る必要がある。

脚注

- 1) 韓国ではこの「略図」(第1次地形図・仮図)については「旧韓末韓半島地形図」、「基本図」(第3次地形図)については「日帝強占領期地形図」という用語が用いられている。
- 2) 例えば光岡雅彦(1982)は「板橋里」の注音である「トドリ」に着目し、「四加里(ヌドリ)」と近親性を持つと主張している。しかし、「トドリ」は「널다리(neoltari)」という地名に基づいて注音されたものであり、「ヌドリ」は「너더리(neodeori)」という地名に基づいて注音されたものである。『韓国地名総覧』によると「너더리」が「널다리」から由来したとされる地名も存在するが、それ以外の由来を持つものもあり、「板橋里(トドリ)」と「四加里(ヌドリ)」の音相だけで「親近性」を持つと即断することはできない。
- 3) 光岡雅彦(1982)は「(地名の)音韻的特性を各実例につき丹念にしらべると、慶州地区と伽耶地区と全羅地区に発音習俗上の差があり、いわば方言性が浮上する」と述べている。
- 4) 「旧韓末」を一枚ごとに画像データ(ラスターデータ)として保存し、これを地理情報解析プログラムである「ArcGIS」に読み込み、画像データ上の地名にポイントを設定してデータベースを作製して分析を加えた。
- 5) ただし①～⑤は北朝鮮に含まれる地域であるため、推定に基づく再構形を提示した。

参考文献

- 尹幸舜(1994)「日本書紀古写本に見える『城』の訓法」『朝鮮学報』第151輯
- 越智唯七(1917・1994)『新旧対照朝鮮全道府郡面里洞名称一覽』中央市場(草風館)
- 小林茂・他(2008)『復刻版・外邦測量沿革史(草稿)』(十五年戦争極秘資料集補巻30) 不二出版
- 清水靖夫(2009)「日本統治機関作製にかかる朝鮮半島地図の概要」『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域』大阪大学出版会
- 谷屋郷子(2004)『朝鮮半島の外邦図の作製過程』大阪大学文学部卒業論文
- 中村新太郎(1925)「朝鮮地名の考説」『地球』(京都帝国大学理学部地質学教室)第4巻1号
- 光岡雅彦(1982)『韓国古地名の謎』学生社
- 김중혁(2009)「『구한말 한반도 지형도』에 수록된 지명의 유형 분포」『문화역사지리』제21권 제2호
- 宋基中(2001)「近代 地名에 남은 訓読表記」『地名学』6 한국지명학회
- 이기문(1991)「高句麗의 言語와 그 特徴」『国語語彙史研究』東亜出版社
- 李炳銑(1982)「韓国古代国名・地名研究」蜚雪出版社
- 한글학회(1966-1986)『한국지명총람』한글학회
- 한글학회(1991)『한국땅이름큰사전(상·중·하)』한글학회
- 拙稿(2011)「『구한말 한반도 지형도』 지명의 자료적 가치에 대하여」『地名学』17 한국지명학회
- [付記]本研究は平成23年度科学研究費助成事業(課題番号23520518、基盤研究C、『外邦図(朝鮮)』による朝鮮地名・朝鮮語研究)の助成を受けて遂行中のものである。